

シンポジウム

平成三十年度皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術シンポジウム

（平成三十年十二月二十二日〔土〕午後一時三十分～五時 於皇學館大学 佐川記念神道博物館講義室）

鈴木重胤翁の人と事蹟

〔発題者（発題順）〕

浦野綾子氏（当センター助教）

佐野真人氏（当センター助教）

加茂正典氏（本学文学部教授・当センター共同研究員）

〔司会〕 大平和典氏（当センター准教授）

平成三十年度皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術シンポジウム

(平成三十年十二月二十二日〔土〕午後一時三十分～五時 於皇學館大学 佐川記念神道博物館講義室)

鈴木重胤翁の人と事蹟

〔発題者(発題順)〕浦野綾子氏(当センター助教)

佐野真人氏(当センター助教)

加茂正典氏(本学文学部教授・当センター共同研究員)

〔司会〕大平和典氏(当センター准教授)

〔開会〕

〔佐野真人〕皆様、本日は足元の悪い中をご参集頂きましてありがとうございます。定刻となりましたので、只今より平成三十年度皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術シンポジウム「鈴木重胤翁の人と事蹟」を開催させていただきます。開催に先立ちまして研究開発推進センター長の<sup>大島信生</sup>より御挨拶申し上げます。

〔研究開発推進センター長挨拶〕

〔大島信生〕失礼いたします。本日は平成三十年度皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術シンポジウムにご来場賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。私は研究開発推進センター長を務めさせていただいている大島でございます。

ます。どうぞよろしく願いたします。神道研究所では春学期には公開学術講演会、そして秋学期にはこの公開学術シンポジウムを開催いたしております。また部門研究として第一部門神道思想、第二部門祭祀、第三部門神道史、第四部門宗教・民俗、第五部門文学・芸術といった五つの部門別研究を行っております。今回のシンポジウムは第二部門が担当ということで、本学文学部神道学科教授の加茂正典先生に企画をお願いいたしました。本日のシンポジウムは「鈴木重胤翁の人と事蹟」というテーマで行われます。本日のご案内の紙にも書かれていますけれども、本学における重胤翁の研究と申しますと、元学長の谷省吾先生が終生の研究テーマとされてきたところがございます。神道研究所では、神道資料叢刊として『鈴木重胤紀行文集』を刊行しております。本年重胤翁の自筆の書籍書簡など、一五三四点を大瀧直之助様のご好意により寄贈を受けましたところであります。

それを「羽前大瀧家伝来鈴木重胤先生関係資料」ということで收藏することとなりました。本日のパネリストは本学の浦野綾子先生、佐野真人先生、そして加茂正典先生からそれぞれお話を頂戴することになっております。司会は大平和典先生にお願いしております。このシンポジウムを機会に鈴木重胤翁の研究がさらに活性化されればと思っております。本日は五時までという長時間にわたります。会場の皆様におかれましては最後までどうぞよろしくお願いいたします。以上簡単ではありますがご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございます。ました。

【佐野】大島センター長、ありがとうございます。それではまず私の方からシンポジウムの開催趣旨を、司会の大平先生から登壇者のご紹介、本日のスケジュールについてご説明させていただきます。

鈴木重胤翁（一八一二～一八六三）は、淡路国津名郡仁井村（現在の兵庫県淡路市仁井）の庄屋・穂積重威の五男として生まれ、嘉永・安政にかけて『延喜式祝詞講義』『日本書紀伝』の著述に努めてまいりました。畢生の名著ともいえる『日本書紀伝』は未完成のまま、江戸小梅の自宅で遭難し暗殺されました。本学における重胤翁の研究は、元学長の谷省吾先生が終生の研究テーマとされており、神道研究所では神道資料叢刊九『鈴木重胤紀行文集』（二～四）を刊行してきました。本年の初頭には、重胤翁の自筆の書籍・書簡類など一五三四点を代々保管されてきた大瀧直之助氏の御厚意により一括して寄贈を受け、『羽前大瀧家伝来 鈴木重胤先生関係資料』として收藏することとなりました。これを機会として、資料の研究を通じて「鈴木重胤翁の研究」のさらなる活性化をはかり、鈴木重胤翁の学問の足跡を後付け、その文化的な神髄の一端を明らかにしたいという趣旨から本日のシンポジウムを開催した次第です。

【大平和典】続いて私の方から、登壇者の紹介をさせていただきます。はじめにお話しいただきますのは研究開発推進センター助教の浦野綾子先生です。浦野先

生は、昭和五十九年、三重県生まれ、皇學館大学大学院文学研究科博士後期課程国文学専攻単位取得満期退学され、現在は皇學館大学研究開発推進センター助教。皇學館大学 佐川記念神道博物館学芸員をお務めになっておられます。御専門は近世文学です。二番目にお話しいただきますのは、同じく研究開発推進センター助教の佐野真人先生です。佐野先生は、昭和五十七年、静岡県生まれ、皇學館大学大学院文学研究科博士後期課程国史学専攻単位取得満期退学されました。その後、博士（文学）の学位を得られております。現在は皇學館大学研究開発推進センター助教をお務めで、御専門は、日本古代史・神道史です。最後にお話しいただきますのは、文学部神道学科教授の加茂正典先生です。加茂先生は、昭和三十年、大阪府生まれ、同志社大学大学院文学研究科博士後期課程文化史学専攻単位取得退学され、その後博士（文化史学）の学位を得られました。現在は皇學館大学文学部教授をお務めで、研究開発推進センター神道研究所の共同研究員も兼任されておられます。御専門は、神道史・神道祭祀・日本文化史です。最後に本日のスケジュールを確認したいと思います。浦野先生、佐野先生の御発題の後に休憩をとりまして、加茂先生の御発題とすすめまして、相互討論・質疑応答を行いまして午後五時頃を目途に終了したいと思います。どうぞ、よろしくお願ひ申し上げます。

#### 〔発題一〕

### 鈴木重胤の足跡

浦野 綾子

【浦野綾子】研究開発推進センターの浦野と申します。よろしくお願ひいたします。では、さっそく始めたいと思います。

私は、専門が国文学、特に近世文学を勉強している身なのですが、残念ながら、

国学者である鈴木重胤について専門的に研究しているわけではありません。重胤の学術的な面については、このあと登壇される先生方にお願ひしまして、私からは「鈴木重胤の足跡」と題して、重胤とはそもそもどのような人物だったのか、どんな人物と交流していたのか、といったことを、資料を紹介しながら見ていきたいと思ひます。

鈴木重胤という人物のことはご存じでしょうか。ご参加いただいている皆様は、重胤のことをよく知っていらつしやると思ひます。ところが私はと言ひますと、重胤について知っていることは、ごくごく一部のことでだけでした。まず、重胤は国学者であること、そして、かなりの数の著作を残していること。特に『日本書紀伝』や『祝詞講義』といった有名な本を残していること、といった基本的な情報ばかりです。しかし、そのような素晴らしい著作を差し置いて、重胤ってどんな人と聞かれて、私が真っ先に思ひつのが、資料の一枚目上段に載せました写真です。これは重胤の自筆の書です。この、何とも言えない独特な字。達筆というのでしょうか、なんだか読みにくい。私が、重胤と聞いて一番に思ひ浮かぶものが、重胤の独特な字でした。

では、このような独特な字を書く重胤とは、いったいどのような人物であるのか、見ていきたいと思ひます。

資料の一枚目、上段の写真の隣に『国史大辞典』の鈴木重胤の項目を、抜粋して載せましたので、そちらをご覧ください。重胤は、文化九年、淡路島の生まれです。平田篤胤の学問を慕ひ、篤胤が秋田に行くと、あとを追いかけるように秋田へ向かいますが、重胤が到着した時には、篤胤は既に亡くなっていました。重胤は篤胤の墓に参り、墓前で門人となりました。このエピソードは、篤胤が本居宣長に夢の中で会い入門したという、「夢中対面」を彷彿とさせます。重胤は篤胤の墓前にて入門した後、江戸に住み著作活動を始めますが、同時に、日本各地を旅しながら学説を広めます。また、宗像信仰の厚かった重胤は、生涯で四度も

九州の宗像神社へ参詣に訪れます。そのように過ごしていた重胤ですが、江戸の自宅にて暗殺されてしまいました。享年、五十二歳。重胤は数多くの著作がありますが、その中には紀行文も多数あります。これらの紀行文には、旅行中に会った人名、参拝した神社、史跡、地理、風俗などを細かく書いています。

では、重胤の経歴をもう少し見ていきたいと思ひます。資料一枚目の下段、重胤の略年譜をご覧ください。抜粋した年譜ですが、これを見ていただくと、重胤がかなりの数の旅をしていたことが分かると思ひます。三十二歳の時に秋田へ旅立ち、篤胤の墓前にて入門。三十三歳の時に、これからご紹介する大瀧光憲が重胤に入門します。その後、京、大坂、伊勢などを巡り、先ほども紹介した通り、宗像神社に、四度の参詣を行なっています。

さて、多くの紀行文を残している重胤ですが、重胤の著作はどのくらいあるのか、と言ひますと、資料一枚目の裏面上段をご覧ください。『鈴木重胤の研究』という、谷先生の書かれた本の中に重胤の著作が紹介されており、この『鈴木重胤の研究』によれば、重胤の著作は、自筆で残っているもの、写本にて伝わるもの、現在は所在不明のもの、すべてを合わせますと、全部で百五十部になるそうです。『鈴木重胤の研究』掲載の著作の一部を抜粋して資料に載せましたので、ご覧いただければと思ひます。このように、重胤の著作は数多くありますが、冒頭で紹介したように、あの独特な字で書かれています。翻字もなかなか大変だと思ひますが、重胤の著作は翻刻されているのかと言ひますと、『鈴木重胤全集』全十三巻が出ています。この全集は、重胤の膨大な著作のうち、『日本書紀伝』と『祝詞講義』を、主に取り扱っています。

『鈴木重胤全集』は、刊行のための資金集めに、かなり苦心したようです。資料の上段「鈴木重胤全集」刊行の経過をご覧ください。これは、昭和十二年十一月に富山県神職会が発行した『神社』という機関誌に載っていたものです。これによれば、出版資金のために『鈴木重胤全集』の全冊購入の予約をしてほし

いこと、大富豪の本間家が援助しているから途中で出版取り止めなどにはならないから、安心して予約してほしいことが記されています。このようにして出版された『鈴木重胤全集』ですが、先ほども言いましたとおり、内容は『日本書紀伝』と『祝詞講義』が主でした。では、他の重胤の著作は翻刻されていないのかと言いますと、今回のシンポジウムを開催している神道研究所から、『鈴木重胤紀行文集』が全四冊出ています。この本の内容は、重胤の未公刊の著作のうち、紀行文を取り上げて注を付けたものとなっています。ここからの発表内容は、この『鈴木重胤紀行文集』をもとにして、重胤が旅先で出会った人を紹介していきたいと思います。重胤が旅先で出会った、紀行文に名前を記されている全員を紹介するには時間が足りませんので、出羽の大瀧光憲、伊勢の孫福弘運、三河の羽田野敬雄、この三人を見ていきます。

それでは、資料の下段をご覧ください。出羽の大瀧光憲から紹介していきますが、この大瀧光憲は、この後に登壇される加茂先生が詳しく述べられると思いますから、私からは簡単なご紹介に留めさせていただきます。大瀧光憲は、出羽の酒造家でした。出羽の大山を訪れた重胤に入門しますが、重胤はこのとき三十三歳、光憲は四十六歳であり、光憲の方が年上でした。入門後は、重胤の著述活動や生活の援助を行ったり、次男を重胤の養子に出しています。

光憲は重胤の紀行文に多く登場します。紀行文の一つ、『皇京日記』を見てください。

『皇京日記』は、弘化三年四月に重胤が京都へ旅行したときの記録ですが、冒頭には、重胤の回想が記されています。この回想の中に大瀧光憲のことが出てきます。大瀧光憲は沈勇絶倫であり、重胤より年が上であるが、自分の門人となり、志を同じくしている人だ、と記しています。

この大瀧光憲は、数多くの重胤の資料を所蔵していました。大瀧光憲のご子孫は、これらの資料を受け継ぎ大切に保存されておりました。そのような貴重な資

料を、今年の三月に一括して皇學館大学へ寄贈してくださっています。

さて、大瀧光憲ですが、次男を重胤の養子に出しています。この次男は鈴木の名を名乗り、名前を光胤と改めるのですが、この経緯が『皇京日記』に記されています。

弘化二年、次男に鈴木の名を名乗ることを許し、父の光憲の求めに従って、名前を光胤と改めた。光胤の「光」の字は大瀧家の家の字であり、「胤」の字は重胤からとった。重胤という名前は、幼い時に重胤の父が名付けたものだが、「胤」という字の縁あつてか、重胤は平田篤胤を慕うようになった、と記しています。

大瀧光憲については、後程、加茂先生が詳しく述べられるでしょうから、このあたりにおきまして、次に、伊勢の孫福弘運について述べていきたいと思います。資料の二枚目をご覧ください。

伊勢の孫福弘運は内宮の権禰宜です。宇治橋を渡った一の鳥居の前に邸があったそうです。現在の神宮では、その面影はまったくありませんが、昔は宇治橋の内側にも家が建っていたのですね。重胤は伊勢に立ち寄ると、必ず孫福の家を訪れ、宿泊していたそうです。重胤の紀行文『嘉永六年癸丑日記』の「伊勢詣紀行日記」には、重胤が孫福の家を訪問したことが記されています。

重胤は孫福の家に泊ると、この地の門人たちに講義を行ったり、また、林崎文庫に出かけたりしていたようです。資料『嘉永六年癸丑稿』をご覧ください。線を引きましたが、重胤が林崎文庫に行ったこと、また、外宮の豊宮崎文庫で行われた歌会に参加したことが記されています。皆さまもご存じの通り、この神道博物館の隣にあります神宮文庫は、林崎文庫や豊宮崎文庫を合わせて設立した文庫です。今でも内宮の前には、林崎文庫の講堂などが残っておりますし、この皇學館大学とも縁の深いところです。孫福の家は、宇治橋を渡った先にあったそうですから、重胤も林崎文庫へは通いやすかったのではないのでしょうか。

一方、外宮近くにある豊宮崎文庫ですが、現在は残念ながら、その跡地が残っ

ているのみですが、歴史は古く、鎌倉時代には「神庫」として、その存在が確認されているそうです。神職の方たちが教養や知識を深めるために、設立し利用していたという神庫ですが、この神庫というのは、上級の神職の方たちしか利用できず、なかなか閲覧を許してもらえないという事情があったようです。そこで、中級、下級の神職でも利用できる文庫を作ろうと、出口延佳らが中心となり設立したのが豊宮崎文庫でした。

この豊宮崎文庫は、七十名の籍中と呼ばれる出資者を募り設立されました。この籍中には、神職だけでなく、御師や、裕福な町人も含まれていたようです。そのような人たちが利用できる文庫という目的でしたから、本の貸し出しも幅広く行っていました。豊宮崎文庫の、本の貸し出しや運営方針を定めた「文庫令条」という、十七条の規定があります。資料に載せたものは、「文庫令条」のうちの一つです。出資者の籍中以外の人にも文庫の本は閲覧させてあげます、事情によっては閲覧を許可します、ということが記されています。ちなみに、文庫というものは、公共図書館の始まりとも言われています。

このように、神職以外の人でも利用していた林崎文庫・豊宮崎文庫ですから、重胤も足繁く通っていたのかもしれませんが。「伊勢詣紀行日記」には、重胤が林崎文庫にて見たであろう書名が登場していますから、こうした書名を拾っていけば、重胤が文庫にて閲覧した本が分かりますし、また、文庫がどのような本を所蔵していたかも分かりますし、現在でも神宮文庫に所蔵されているのかを調べることも出来ます。

孫福も、重胤と「夜いたうふくるまでかた」っていたようですから、神宮の本についてたくさん語り合っていたと思われる。

では、文庫について話しましたので、同じく文庫にまつわる、重胤が交流をもった人物を最後に紹介したいと思います。資料の下端、三河の羽田野敬雄です。

羽田野敬雄は、重胤と同じく幕末の国学者です。現在の愛知県豊橋市にありま

す羽田八幡宮の養子となり、跡を継ぎます。本居大平や平田篤胤に入門し、平田鉄胤と親しく、三河地方の平田派門人の中心人物であったようです。羽田野敬雄は、寄付を募り書籍を蒐集し、羽田八幡宮文庫を設立しました。羽田八幡宮文庫には、一万巻の本が蒐集されていたそうです。現在、羽田八幡宮文庫にあった蔵書は、豊橋市の中央図書館や、西尾市の岩瀬文庫が所蔵しています。

重胤は羽田野敬雄とも親しく、旅の途中には羽田野の家に立ち寄っています。重胤の紀行文『筑紫再行』から、羽田野敬雄について記された箇所を取り上げたいと思います。

『筑紫再行』は、重胤の生涯四度の宗像大社参詣の旅の、二度目の記録です。行き帰りに伊勢神宮へも出向き、孫福の家に立ち寄っています。また、『筑紫再行』には、各地の学者や文化人との交流の様子も記されています。

資料二枚目の裏面をご覧ください。『筑紫再行』に「羽田野氏をとへるに」と、重胤が羽田野のもとへ行ったことが記されています。羽田野も「待よろこびて」とあるように、羽田野が重胤の訪問を心待ちにしていたことも窺えます。さらには、重胤の著作である『日本書紀伝』を、十四巻四冊貸していたことも記されています。また、その後には、「朝よりも書て、夕よりは文庫にて、祝詞式とく」とあります。文庫とは、羽田八幡宮文庫のことでしょう。重胤は羽田八幡宮文庫にて、本を閲覧していただけではなく、講義を行っていたことが分かります。

羽田野敬雄と鈴木重胤の交流については、『鈴木重胤の研究』にも詳しく記されています。平田派の門人でもあり、平田家と親しく交流していた羽田野敬雄ですが、重胤が平田家と絶交になったあとも、羽田野と重胤の交流は変わることなく続いています。また、羽田八幡宮文庫のため本を集めていたこともあり、重胤も本を寄贈したとみられます。重胤が寄贈したと思われる本が、羽田八幡宮文庫の蔵書目録の中に記されています。羽田野敬雄が明治九年に書いた、「羽田文庫蔵書目録」という、自筆の羽田八幡宮文庫の蔵書目録が残っています。これには、

羽田八幡宮文庫が所蔵する本の名前、その本の執筆者、出版年、そして、寄贈者と思われる人名が記されています。資料の下段、羽田八幡宮文庫の蔵書の箇所をご覧ください。「羽田文庫蔵書目録」から、寄贈者の名前が鈴木重胤のものを抜きだしました。私が見落としがなければ、重胤は全部で十一部を寄贈しています。寄贈本のなかには、重胤自身の著作もあれば、松浦武四郎の著作も見られます。このように、重胤は、羽田八幡宮文庫で講義を行ったり、本を閲覧していただくだけでなく、文庫のために本を寄贈していたことも分かります。

さて、羽田野敬雄と鈴木重胤ですが、『鈴木重胤の研究』を見ますと、「江戸の重胤が西への旅の途中には、敬雄の家にとまって語りあふのがつねであったが、安政六年三月遠江国新居の地鎮社の鎮座祭が、重胤をむかへておこなはれたとき、敬雄も同地におもむいて祭典をたすけた」とあります。「地鎮社」については、このあと加茂先生が詳しくお話されるでしょうから、ここでは簡単に紹介しようと、大地震の後で、重胤が勧めて建てた社のことです。資料の上段『筑紫再行』を見てください。羽田野の家を訪れた重胤ですが、羽田野と一緒に新居を訪れ、建立したばかりの地鎮社に行っています。この紀行文は安政五年の旅の記録ですが、この地鎮社が建った年は、將軍・徳川家定が亡くなった年ですので、神事をおこなうのは憚られる、という意見から、この『筑紫再行』の時には「地鎮社」の儀式は行わず、仮の遷宮を行ったとあります。同行の羽田野敬雄は、この「地鎮社」の祭典を助けたほか、この社の「あらし」をしたためていることも、この紀行文からは分かります。

以上、重胤とはそもそもどのような人物だったのか、というところから、重胤と交流のあった三人の人物を紹介いたしました。今回の発表にて取り上げました、神道研究所が刊行した『鈴木重胤紀行文集』ですが、この中に収録されている紀行文の解説を、資料の最後の一枚に載せました。ご興味がありましたら、ご覧いただければと思います。

『鈴木重胤紀行文集』の紹介を兼ねて、私の発表は終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

## 〔発題二〕

### 鈴木重胤翁と日本書紀伝

佐野 真人

【佐野】ただいま御紹介をいただきました研究開発推進センター神道研究所の佐野でございます。本日は「鈴木重胤翁と日本書紀伝」というテーマで報告させていただきますが、私自身は、古代の天皇・朝廷の祭祀や儀礼を専門にいたしており、近世、ましてや「鈴木重胤翁と日本書紀伝」については、全くの門外漢です。先ほどの趣旨説明にもありましたように、鈴木重胤先生の史料を長く保管されてこられた大瀧家より、本年の春に格別の御厚意によって御寄贈いただき、神道研究所においては今後の重要な研究テーマとして鈴木重胤先生の研究を進めて行かなくてはなりません。その第一歩として、鈴木重胤先生の学問とは如何なるものであるかを今後勉強していくために、本日は重胤先生がどのような意識を持たれて『日本書紀伝』を執筆されていたのかを確認してまいりたいと思います。まず、鈴木重胤先生とは、どのような人物であったのか簡単に確認するために、『国史大辞典』の説明を掲載しております。趣旨説明や浦野先生の御発表と重複を致しますので、全ては読み上げません。

## 〔鈴木重胤翁〕

幕末の国学者。幼名雄三郎、通称勝左衛門、檀廬舎・嚴檀本と号し、府生・桂州ともいう。文化九年（二八一二）五月五日淡路国津名郡仁井村（兵庫県津名郡北淡町）の庄屋の家に父穂積重威・母麗子（岡本氏）の五男として生

まれ、父の薫陶により国学に志した。文政八年（一八二五）父が没すると傾きつつあった家産の恢復をはかるため大坂の商家鴻池善右衛門のもとに見習いとして住み込んだが三年ほどでいったん帰郷、再び家郷を出て次には神戸の商家橋本藤左衛門の保護を受けた。この間商売よりも国学の道に励み、天保三年（一八三二）平田篤胤に入門名簿を送り、書信をもって教えを受け、同五年ころには大國隆正に入門した。同八年橋本家を去り帰郷したが同十年再び大坂に出、門戸を構えて和歌を教授した。同十四年篤胤と面会したいという宿望を果たすため秋田行を決意、母への暇乞いのため帰郷したあと出立、神戸・大坂・京都・金沢・新津・酒田を経て目的地に着いたが、この時篤胤はずでに病没していたので、その霊前で門人となった。その後江戸日本橋村松町に居を定め著作活動に努める一方、越後・出羽・九州など各地を旅行して学説を弘め、特に出羽庄内の酒造家大滝光憲、越後新津の豪農桂誉重をはじめこの地方の民間有力者の信奉を受けた。庄内には一年あるいは二年を隔てて講説に赴き、弘化二年（一八四五）光憲の次子光俊を養子に迎えている。嘉永元年（一八四八）『延喜式祝詞講義』を起稿、同六年に完成すると庄内に出向き光憲の学舎賢木舎さかきのやに門人を集めて完稿奉告の祭事を執行了した。帰宅後まもなく『日本書紀伝』を起稿、これは前著とともに代表的著作と称すべきものであるが未完に終わった。「日本書紀辱くも朝廷の正史也、祝詞は朝廷の式文也」（『答問書』）として『日本書紀』と祝詞を特に重視した。『延喜式祝詞講義』執筆のころから次第に篤胤学批判を前面に押し出したことから、安政四年（一八五七）平田鉄胤との不和を生じ、数回の応酬のち翌五年鉄胤から絶交を通告された。元来敬神の念すこぶる厚かったが、秋田への出立に際し花山院家邸内の宗像神社に参拝したのを契機に宗像信仰を強め、その本社たる筑前の宗像神社へ四度参詣、その途次、長州の白石正一郎・林勇蔵らにも影響を与えている。文久三年（一八六三）八月十五日、安政二年から

鈴木重胤翁のひと事蹟（シンポジウム）

住んだ江戸本所小梅（東京都墨田区向島）の自宅で暗殺された。五十二歳。市ヶ谷の長延寺（のち杉並区和田一丁目に移転）に葬る。当時、幕府の内命を受けて廃帝の故事を調査したため尊攘派志士に狙われたとの説が流布したが、現在ではこれは根拠のない巷間の流言とされ、暗殺事情は不明である。著書には上記二著のほか『詞捷徑』『古始天元図説』『神代真言』『世継草』『経緯談』『中臣寿詞講義』『祝詞正訓』などがある。なお、紀行文として現存するものに『神習紀行』『皇京日記』『辛亥紀行』『伊勢詣紀行』『宗像詣記』などがあり、これらには旅行中に面接した人名、参拝した神社、史蹟、土地の地理・風俗などを詳らかに記している。著書は『鈴木重胤集』（『国学大系』二二）に所収のほか、『鈴木重胤全集』全十三巻がある。

（『国史大辞典』）

つぎに『日本書紀伝』という書物について、谷省吾先生の『鈴木重胤の研究』に収められた「鈴木重胤著述目録」から確認したいと思います。まず「自筆一四七山形県大山町大瀧直之助氏」の所蔵とありますが、こちらの自筆草稿本一四七冊が寄贈を受け、現在は神道博物館の収蔵庫に収蔵されております。

嘉永六年（一八五三）九月十八日開宴、十一月十四日起稿、文久二年（一八六二）四月二十六日に三十二之巻が脱稿、同三年（一八六三）八月十五日に江戸小梅の自宅において遭難されました。最後に触れますが、重胤先生は遭難する直前には三十三之巻の執筆中であつたことを大瀧家へと書簡に記して送っておられます。『日本書紀伝』は、言うまでもなく『日本書紀』の注釈書です。全集本では巻一から「神代上」となっていますが、草稿本では「神代上」は三之巻から始められております。これは一、二之巻は総論にあたりとされたためです。『日本書紀伝』は、三十二之巻で「神代下天孫降臨章第一の一書」まで及んでいます。遭難によって『日本書紀伝』は未完に終わり、執筆の途中であつた三十三之巻の草稿は行方不明となっています。『日本書紀伝』の草稿は、出来上がると江戸から出羽

国の大瀧光憲のもとに送られ、写本を作成の上、その写本を江戸へ送り返しております。『日本書紀伝』を朝廷に献上することは重胤先生の素志でありましたが、果たすことはできませんでした。明治七年（一八七四）には、教部省の命によって稿本を一時、教部省に提出したこともあり、明治二十七年（一八九四）には諸陵頭の足立正声の斡旋によって秋野庸彦らが謄写をはじめ、明治三十三年（一九〇〇）に完成して皇室に献納しました。これが現在残されている宮内庁書陵部本です。現在、本センター副センター長の荊木美行先生を中心に、書陵部本『日本書紀伝』の複写をすすめており、今後は本学に所蔵されることになった草稿本との比較研究をしてゆく予定となっております。

先ほど「嘉永六年九月十八日開宴」と言いましたが、『日本書紀』完成直後の養老年間から、ほぼ三十年に一度の間隔で村上天皇の康保二年（九六五）まで『日本書紀』の講書、いわゆる講義が朝廷において行われており、その後には「竟宴」が行われていました。その竟宴では、『日本書紀』の中から与えられたテーマで和歌を詠んでおり、『日本紀竟宴和歌』として残されています。これに倣って重胤先生は、『日本書紀伝』の執筆に際して「開宴」を行い、門人たちが和歌を詠んでいます。その和歌を重胤先生が添削されたものも、寄贈された資料の中に入っております。

さて、『日本書紀伝』の各巻が、いつ起稿され、いつ脱稿したのかについては、各巻の奥書に詳細に記されており、谷省吾先生の「鈴木重胤著述目録」にも掲載されていますので、本日は省略致します。

本日は『日本書紀伝』という大著に、鈴木重胤先生の『日本書紀』研究に対する姿勢というか、どのような認識であったのかという視点から考えてまいりたいと思います。そこであげましたのが、史料一の「奉告日本書紀伝再稿之由於 宗像 梶尾二所大神等乃天社国社之 皇神等一文」（自筆稿本『日本書紀伝』巻五下）です。本資料は、『日本書紀伝』巻五（神代七代章）奥書の次丁以降に、鈴木重胤先生

自身が書いた宗像・梶尾大神への奉告文です。この他に「奉告日本書紀伝宝鏡 開始章成由於皇神等」且寿下宗像大神東京小一条亭社成而遷三座新殿之事上詞」・「奉告日本書紀伝二十三卷稿成」且為奉迎宗像大神」欲發三途於筑紫国」之由 梶尾・宗像二所大神及天神地祇上文」があり、いずれも全集本には未収です。『鈴木重胤皇学論纂』（図書出版、昭和十九年）には、「日本書紀伝神代上巻脱稿之奉賽 献物目六並びに告文」が掲載されています。配付資料の九頁以下には奉告文の全文翻刻を掲載しています。非常に長い文章ですので、時間の関係で全てを読んで解釈することはできません。そこで本日は、重胤先生の姿勢が特に強く感じられるところを抜き出して見ていきたいと思います。

①「皇御孫尊（乃）遠守（止）皇大御書（乎）説明（米氏）皇大御学（乃）業（尔）仕奉（流）穂積朝臣重胤」

ここで重胤先生は、『日本書紀』を「皇大御書」として理解し、『日本書紀』を説明（注釈）して「皇大御学（日本国の学問）」に従事することが自身の使命であると考えておられます。

②「平宣長・平篤胤等（我）武（伎）雄偉（伎）志（乎）繼（伎）美（多久）善（志伎）迹（乎）遂（氏）此大業（尔）仕奉（良久止波）」

ここでは、本居宣長・平田篤胤の志を継ぎ、大業、すなわち『日本書紀』の研究、『日本書紀伝』の執筆に従事することを述べています。

③「思起（志氏）此皇大御学（尔）仕奉（良牟）事、海往（加婆）水漬（久）屍山行（加婆）草生（須）屍（止）夏（止）秋（止乃）暑（伎）間（波）日経・日緯・影面・背面（乃）国（乎）行巡（良比氏）世人（乎）教導（伎）、冬（止）春（止乃）寒（伎）間（波）家内（尔）固（久）閑居（氏）皇大御書（乎）説明

〔良米〕仕奉〔利氏〕世中〔乎〕顧無〔久〕功〔志美〕勤〔米氏〕此大業〔止〕共〔尔〕生〔伎〕此為業〔止〕共〔尔〕死〔氏〕一日一夜〔毛〕平和〔尔波〕不〔在〕〔止〕思定〔氏〕此許多〔久〕著述〔世流〕五百卷千卷〔乃〕書卷〔波志毛〕

ここでは、夏と秋との暑い季節は諸国を巡り人々を教え導き、冬と春との寒い季節は家の中に固く籠もり、「皇大御書」(『日本書紀』)の説明(注釈)に世の中を顧みることなく従事し、大業(『日本書紀伝』の執筆)と共に生き、また共に死ぬ覚悟で著述をすすめる決意を持たれていることを窺い知れます。

④「此皇大御書〔乎〕以〔氏〕天石盾〔乃〕如〔久〕立塞〔氏〕待防却〔利〕言排〔流〕器〔止〕成〔志氏〕掃〔比〕皇国〔乃〕人〔尔〕朝廷〔乎〕圍〔万比〕軍起〔須〕事有〔止毛〕此皇大御学〔乎〕以〔氏〕守奉〔利〕仕奉〔良牟尔波〕防〔久尔波〕天進〔利〕高〔伎〕大城〔乃〕如〔久〕有〔利〕退〔流尔波〕広矛〔止〕成〔利〕利劍〔止〕成〔利〕天柅弓〔止〕成〔利〕天羽々矢〔止〕成〔氏〕人無〔伎〕地〔乎〕行通〔我〕如〔久奈毛〕有〔倍伎止〕」

『日本書紀』は、国民が朝廷に対して謀叛を起こしたとしても、広矛・利劍・天柅弓・天羽々矢となつて、「皇大御学」によつて国を守護する物であると述べています。

⑤「某甲〔我〕此皇大御学〔乃〕尊〔伎〕高〔伎〕広〔伎〕厚〔伎〕業〔尔〕恐〔志〕我大神〔乃〕大御靈〔乎〕幸依〔志〕給〔閉〕哉。吾父穗積朝臣重威〔我〕遺訓有〔氏〕二部三部〔乃〕書〔乎〕賜〔比〕、母麗子〔我〕教訓〔尔波〕物能〔久〕書記〔世止〕仰〔多流〕事〔尔波〕有〔礼杼毛〕如何〔尔〕為〔氏加〕有〔祁武〕三十余〔利〕二〔止〕云年迄〔尔〕心〔波〕有〔奈賀良尔〕志〔止〕云物〔奈毛〕不〔立〕不〔通〕〔氏〕有〔祁流乎〕」

重胤先生が「皇大御学」と尊ぶ学問を志した理由について簡潔に述べています。

まず、第一に、父・穗積重威の遺訓があり、二部三部の書物を与えられ、母・麗子より物事を細かく書き留めておくようにとの教えがあつたが、三十二歳までは心に留め置きながらも志を立てずにいたとあります。

つづけて、天保十四年(一八四三)正月に皇京に下つた折りに、小一条邸に祀られていた宗像大神のもとに参り、志を立てるとあり、そして、平田篤胤を師として学ぶことを決意しましたが、出羽国(秋田)に到着したときには、篤胤は既に歿していました。

⑥「其田川郡〔尔〕大山〔止〕云〔布〕大里有〔祁理〕、此処〔尔〕藤原光憲〔止〕云〔波〕其国〔尔氏波〕物知〔止〕云人〔尔〕在〔尔〕、荒木田末寿〔我〕許〔尔〕伊勢〔尔〕学〔比〕貞直〔乃〕郷〔乎〕慕〔比氏〕京都〔尔〕上〔礼利志〕人〔尔氏〕、其学〔毛〕跋々〔志加良奴賀〕吾〔乎〕見知〔流〕人〔尔氏〕、其族穂野重義・藤原光賢・照井足根・照井長柄等〔乎〕率〔氏〕教子〔止〕成〔祁流余利〕漸〔尔〕吾家門〔奈毛〕広〔久〕盛〔尔波〕成〔礼利祁流〕」

ここで、は重胤先生にとって重要な人物である大瀧光憲に関して述べられています。大瀧光憲との関係は、次の加茂先生の御発表で詳しく触れられると思いますが、鈴木重胤先生と大瀧光憲の関係について、参考として谷省吾先生の『鈴木重胤先生―人と心―』をあげておきました。

山形県西田川郡大山町の大瀧家といへば、かつては代々酒造りをしてゐた豪家であり、家主直之助氏の五代前に当る光憲といふ方が、重胤先生の最も熱心な門人でした。天保十四年(一八三四)秋田に下られた先生が、同地で年を越したその翌年、弘化元年(一八四四)六月のこと、秋田から江戸へ出る途中に、この大山に立ち寄られたのですが、光憲は、この先生に入門されたのであります。若い時分に伊勢に留学して荒木田末寿に学んだこともあり、相当の学識を以てきこえたこの人が、十三も年下の先生に、一見

して傾倒されて、しかも弟子の礼をとられたのでした。

大山を含めた莊内しやうないには、先生の弟子は、たくさんできましたが、それらの人々は光憲を中心として固く結束し、師の生活についても後顧うしろの憂へなからしめました。現在でも、それらの人々の子孫の方々が、厳檀会いつくしを結成し、毎年九月十日を期して、先生の霊祭をつづけてをられることは、すこぶる感銘の深いものがあります。

その大瀧家には、日本書紀伝の百四十七冊、祝詞講義の二十三冊をはじめとして、先生の稿本類が、数多く伝へられてゐるのですが、賢木舎さかきのやと称せられたそのおやしきの一隅に、古い、みやびな茶室があつて、先生は、大山に來ると、そこで勉強をされたといはれてをります。……

以上のように、谷先生は叙述されております。詳しくは加茂先生の御発表に譲りたいと思います。

⑦「自レ其追繼〔氏〕日本書紀伝〔止〕云書〔乎〕著述〔志氏〕、天地〔乃〕立〔流〕始〔止〕世中〔乃〕起〔留〕所由〔乎〕明〔良米〕、皇神〔乃〕御所為・万神〔乃〕御功用・天津日繼高御座〔乃〕御大業・嚴神之宮〔乃〕神事〔乃〕有状〔波〕更〔奈利〕、臣・連・伴造・国造・百八十部〔乃〕氏々〔乃〕由來名々〔乃〕起元〔乎〕正〔志氏〕弁〔多米〕知〔利〕、上〔波〕高天原〔止〕天雲〔乃〕五百重〔我〕上〔波〕天壁立極〔美〕迄〔毛〕、下〔波〕極〔氏〕遠〔志止〕云〔布〕根国底国〔止〕地下〔波〕底津石根〔乃〕限〔利〕迄〔毛〕知〔良流々〕限〔波〕知尽〔志〕、中〔波〕此大地〔波〕一列〔乃〕物〔尔〕在〔利〕外国〔乃〕末迄〔毛〕二柱御祖神〔乃〕生給〔波受止〕云事〔夜波〕可レ有〔伎止〕考〔氏〕」

ここでは、『日本書紀伝』の著述によって、天地開闢の初めと世の中の起こる所以を明らかにし、皇神の御所為・万神の御功用・天津日繼高御座の御大業・嚴神の宮（賀茂）の神事などはもとより、臣・連・伴造・国造・百八十部の氏の由

來などの起こりを正して明らかにすることである、と述べられています。さらに具体的に、上は高天原などの神々の世界、下は根国底国、中は外国の末端の事までを知り尽くす、ということが述べられています。

ここで注目すべきことは、「外国」の概念を持つていたということです。『日本書紀』には、もちろん欧米の列強諸国のことは出てきません。しかし、重胤先生が執筆をされていた当時は、マシュー・カルブレイス・ペリーの来航によって日本が開国し、欧米の影響を受け始めようとしていた時期でした。ここからは推論の域をでませんが、そのような時に『日本書紀』の研究によって日本国の本質を知ること、外国に対する備えとされようとしていたのではないかと推測されるのではないのでしょうか。

⑧「吾心〔波〕吾物〔尔波〕非〔受〕、大神〔乃〕大御心如是〔久〕陸靈合〔氏〕令レ然有レ給〔倍流〕物〔止〕思〔倍婆〕、此説共〔波〕吾言〔尔〕出〔氏〕吾説〔尔波〕非〔受〕吾〔我〕大神〔乃〕事依〔志〕授賜〔倍留〕大御言〔止〕受賜〔利氏〕思浮〔布〕説等書註〔志氏〕」

ここでは、自分の心は自分のものではなく、大神の大御心であり、自分の唱える説は、大神が自分に授け賜った大御言と受け止めて思い浮かぶままに説を書き記した、と述べ、⑧に続く文章（末尾の当日配付資料を参照）において、『日本書紀伝』を、三巻から二十二巻（七十一冊、二百五十五張）まで書き進めた。そこで改めて五巻を見ると、四年以上も前に書き記したものであるから、自分は力不足であったと恥じて、現在の学力が勝っているかを試して、大神の御霊に自分の身を預けて加えるほどを知って、思い立って書き改めた、ということを書いておきます。

⑨「其事大神〔乃〕宇豆〔乃〕大前〔尔〕訴白〔志氏〕乞奉〔波〕、某甲〔我〕見〔流陀尔〕斯〔流〕僻事〔波〕交〔礼流〕物〔乎〕並〔氏乃〕世人〔乃〕評〔尔波〕可〔抱〕〔伎尔〕非〔受〕、唯後世〔尔〕己〔乎〕知〔流〕一人〔乃〕人〔乃〕為〔尔〕恥〔流〕事無〔久〕可〔久〕弥獎〔尔〕獎〔米〕給〔波牟〕学〔乃〕力餘有〔流〕迄〔尔〕天地〔尔〕思足〔波比〕令〔得給〕〔閉止〕」

ここでは、『日本書紀伝』五之卷の再稿が書き終わったことを大神に奉告し、『日本書紀伝』について、現在の人の評価を期待すべきものではない、と述べています。

重胤先生にとって『日本書紀伝』とは、「後世の己を知る一人の人」のために、恥じることなく学問の力のある限り書き続けるものであるという認識を窺うことができます。

⑩「其皇大御学〔乃〕業〔乎〕受継〔久〕某甲〔我〕然許〔利〕可〔畏〕〔伎〕皇神等〔乃〕大御靈〔乎〕蒙奉〔利〕乍〔尔〕、一日一夜〔毛〕空〔志久〕可〔有〕〔伎尔〕非〔礼婆〕、此五卷〔尔〕当〔流〕本〔乃〕再稿〔波〕書畢〔利氏〕復元〔乃〕所〔尔〕返〔利氏〕、其二十二卷〔乃〕二百五十六張〔余利〕次々〔尔〕夜半曉時〔止〕云〔受〕勤〔米〕結〔利〕仕奉〔利良武〕状〔波〕、今八年〔我〕程〔尔〕凡三百卷許〔尔〕書成〔志〕仕奉〔利氏〕、次〔尔波〕祝詞講義〔止〕中臣寿詞講義〔止乃〕浄書〔乎〕仕奉〔利〕、其事畢〔氏〕後〔尔波〕此日本書紀伝〔乎〕委曲〔尔〕正〔志〕記〔左牟〕事生涯〔乃〕我業〔止〕仕奉〔久止〕為〔氏〕」

ここでは、「皇大御学」の業を受け継いでいる自分は、皇神等の大御靈を蒙り、一日一夜も空しく時を過ごすべきではない、と述べ、五卷の再稿後に、直ちに二十二卷の二百五十六張に戻って『日本書紀伝』の執筆を続ける。そして、『祝詞講義』と『中臣寿詞講義』の浄書の終了後は、『日本書紀伝』の執筆を生涯の業とする、という決意を述べられています。

⑫「常〔毛〕祈奉〔流〕相尾大神〔乃〕御氏子〔乃〕人共〔尔〕、家業〔乎〕被〔助〕〔氏〕令〔書〕〔流〕草稿〔波〕其大神〔尔〕令〔捧奉〕給〔比〕、天下〔乃〕為〔尔〕万世〔乃〕後代〔乃〕為〔尔〕天之御柱・国之御柱〔止〕国鎮〔止毛〕可〔成〕〔伎〕底宝々書〔止〕令〔書給〕〔波牟尔〕」

ここでは、常に祈っている相尾大神の氏子の人々に家事を助けられて書いている原稿は、大神に捧げ、天下のため、万世の後代のために、「天の御柱」「国の御柱」として国鎮め（すなわち国家鎮護）となるべき書物として書き記している、と述べています。

⑬「皇神等〔乃〕御手〔尔〕代〔利氏〕仕奉〔流〕皇大御書〔乃〕尊〔伎〕高〔伎〕広〔伎〕皇大御学〔乃〕業〔尔〕妙〔尔〕奇〔志伎〕可〔美名〕〔乎〕千名〔乃〕五百名〔尔〕負持〔氏〕許々〔太久〕忠〔尔〕功〔志久〕令〔在給〕〔比氏〕」

ここでは、『日本書紀伝』の執筆は、皇神らの御手にかわって自身が仕奉る業である、とまで述べて、重胤先生の並々ならぬ決意を窺うことができます。

ここで大瀧家に宛てた重胤先生の最期の書簡を見てみたいと思います。史料二に挙げました「鈴木重胤先生書簡（大瀧光武宛、文久三年（一八六三）七月二十二日付）」は、大瀧家に存した重胤先生最期の書簡で、八月八日に羽前大山の大瀧家に到着しました。その七日後の八月十五日に先生は暗殺されています。書簡の内容から、三月に宗像詣から帰ってから以後、『日本書紀伝』三十三之卷の著述に専心していたことが窺えます。

鈴木重胤先生書簡（大瀧光武宛、文久三年（一八六三）七月二十二日付）

（前略）

一、日本紀伝卅三卷

著述中、降臨以下之ノ事実、猶亦考索之ノ義も有之、卅一卅二卷ノ之内、見合せ当用之ノ分

五卷 上中下三卷

卅一卷

一一二五八九十十一ノ十二二十三十四十五十六ノ十七十八以上

卅二卷

二三四五六七

右之員數、箱入ニして、ノ此ものへ御渡し被下候様仕ノ度候。尤光賢君当ノ

時廿九相濟、三十卷ニノ御懸り之事と存候。此方ノ十一二月頃迄手明次ノ第指下し候事。

（後略）

書簡の内容から重胤先生は、十一月から十二月頃に『日本書紀伝』の草稿を羽前大山の大瀧家に順次送る予定であったことが察せられます。

以上、かなりの駆け足で、鈴木重胤先生の『日本書紀伝』に対する執筆の姿勢について、「奉告日本書紀伝再稿之由於 宗像 相尾二所大神等乃天社国社之皇神等一文」をもとにして確認してきました。重胤先生の特徴ともいえる「敬神の念」によって、『日本書紀伝』を執筆していただくことが確認できました。特に『日本書紀伝』を執筆し完成させることが、生涯に亘る大業と重胤先生自身が理解して、国家を守護すべき書物として『日本書紀』を尊重しておられました。『日本書紀伝』を著述することで、「皇大御学」によって皇室と国家を護持するということが、重胤先生の学問の中心であると理解して良いのではないかと思います。以上で私の発表を終わらせていただきます。御清聴ありがとうございました。

〔発題三〕

## 鈴木重胤の事蹟

### 加茂 正典

【加茂正典】神道学科の加茂でございます。鈴木重胤の事蹟と題して、重胤が成し遂げた功績とその後の一端をお話したいと思います。よろしく願います。

#### 一、鈴木重胤と大瀧家

鈴木重胤は、文化九（一八一二）年五月五日に、淡路国津名郡仁井村（現淡路市仁井）に出生。父重威（しげたけ）は、仁井村の里正（庄屋）を務める地元有力者であった。重胤は榎酒舎（かしのや）・厳櫃本（いつかしがもと）・府生・柱州などの雅号を称した。厳櫃本は、『日本書紀』垂仁天皇紀二十五年三月条所引「二云」に見える、天照大神の鎮座地に因んでいます。平田篤胤に入門し書面で教えを受け、大国隆正の門人でもあった。天保十四（一八四三）年、三十三歳の重胤は、篤胤に教えを受けるために秋田を訪れます（十一月一日）が、既に篤胤は閏九月十一日に病没していました。悲嘆のうちに、重胤は、篤胤の霊前に入門を誓約します。この時の秋田への旅の紀行文が『神習（かむならひ）記行』です。江戸を中心として、越後・出羽、伊勢、京、筑紫などを旅し、各地の豪農・素封家に影響を広げました。特に、出羽国庄内（現鶴岡市）大山の大瀧光憲（みつあきら）は酒造業を営む素封家で、庄内の門人の中心として重胤の著述と生活を支えました。光憲の次子光俊は重胤の養子となり光胤と改名。

重胤は、『延喜式祝詞講義』・『中臣寿詞講義』・『日本書紀伝』稿本を大山の門人に送り書写させた上で、その写本を江戸に返送させた。稿本は大瀧家において厳重に保管・伝襲されてきました。

重胤は、『日本書紀』と『祝詞』を特に重視し、緻密な考証による堅実な学風

で著名です。安政四（一八五七）年十月頃より、『祝詞正訓』の件、また『日本書紀伝』における篤胤説の取り上げ方をめぐって、平田鉄胤（かねたね）との関係が悪化し、同五年二月には平田門と絶交状態となる。文久三（一八六三）年八月十五日、江戸小梅（こうめ）の自宅において、暴漢に襲われ、『日本書紀伝』を未完のままに、五十二歳の生涯を終えた。

重胤を物心両面で支えた、大瀧光憲と光俊（光胤）について簡潔に述べておきます。光憲は、大山の酒造家で、青年時、伊勢に遊学して荒木田末寿から暦学を学んだこともあり、和漢の学識を有し地域の名望を博した人物です。号は賢木舎（さかきのや）。天保十五（弘化元 一八四四）年六月、光憲は大山を訪れた重胤と対面し、入門を申し出ます。重胤は三十三歳、光憲は四十六歳。

その後、一家を挙げて、また、庄内の一門をまとめて、重胤の著述と生活を支えます。光憲は文久二（一八六二）年十二月九日、六十四歳で没した。重胤は言霊豊光憲霊神（ことだまとよみつあきらのみたまのかみ）という霊号を贈っています。

大瀧家では、毎年九月十一日に重胤の霊祭がおこなわれていました。庄内門人として、大瀧光憲・大瀧光賢・広瀬巖雄・照井長柄・星川清晃・秋野庸彦の人々が合祀されています。厳檀會（いつつかしがいかい）が活動の主体でありました。

大瀧光憲の次子光俊は、弘化二（一八四五）年重胤の養子となり、光胤（みつたね）と改名しました。病身で、重胤の期待むなく嘉永元（弘化五 一八四八）年三月二十四日に二十一歳で没した。東京都杉並区長延寺の二宮家（重胤の妻寿美の実家）墓域内の重胤墓の傍らに「鈴木光胤之碑」が建立されています。文は重胤撰、書は平田鉄胤です。

## 二、鈴木重胤についての研究（明治以降の一部）

重胤は、生涯を通じて膨大な著述物を残しました。その種別も、古典の校訂と注釈、神社関係の考証、祝詞、歌集、日記など多岐にわたります。重胤の年譜と

著作目録は、次の④の谷省吾『鈴木重胤の研究』に記載されています。本学元学長の谷先生は晩年に至るまで重胤研究を続けられ、年譜と著作目録についての修正増補稿が、⑤の谷省吾「鈴木重胤略年譜・著述目録・文章目録 修正増補稿」です。

鈴木重胤についての研究も多いですが、ここでは、その一部をご紹介します。めておきます。

- ① 樹下快淳『贈正五位 鈴木重胤真人物』（遺風顕彰会、昭和十二年）
- ② 『鈴木重胤全集』全十三卷（鈴木重胤先生学徳顕揚会、国書出版創立事務所、昭和十二～十九年）
- ③ 『国学大系二十一 鈴木重胤集』（地平社、昭和十九年）
- ④ 谷省吾『鈴木重胤の研究』（神道史学会、昭和四十三年）
- ⑤ 谷省吾「鈴木重胤略年譜・著述目録・文章目録 修正増補稿」（私家版、平成十七年）
- ⑥ 『神道資料叢刊九 鈴木重胤紀行文集』一～四（谷省吾・加茂正典・吉崎久、皇學館大学神道研究所、平成十五・十八・二十一・三十年）。「神習紀行」・「皇京日記」・「辛亥紀行」・「嘉永六年癸丑稿（伊勢詣紀行日記）」・「嘉永六年癸丑稿 出羽国紀行日記」・「甲寅 宗像詣記」・「筑紫再行」・「幼松庵在留記」・「筑紫四歴」を収録。

## 三、鈴木重胤の代表的著作

次に、重胤の代表的な著作について述べておきます。

○ 『延喜式祝詞講義』十五卷（嘉永元（一八四八）年～同五（一八五二）年）。

「延喜祝詞式」の注釈書。賀茂真淵の『祝詞考』に次ぐ、「延喜祝詞式」の全注釈です。

重胤は、「皇典条理二途」ということを指摘し、『古事記』『日本書紀』は皇統

の事実を記した「大御正史(おほみふみ)」であり、「祝詞」は、朝家の政令、民用の綱紀を備えた「天下の大御政(おほみまつりごと)」の御制度書」と考定しました。「天下の大御政の御制度」の実態を理解するための「延喜祝詞式」の研究です。

○『中臣寿詞講義』二卷(嘉永五(一八五二)年同六年)。

「中臣寿詞(天神寿詞 あまつかみのよごと)」は、持統天皇四(六九〇)年の持統天皇即位式を初見として、中臣氏が即位式・大嘗祭において奏上した寿詞です。藤原頼長の「台記」の別記に、康治元(一一四二)年十一月、近衛天皇大嘗祭の辰日に神祇大副大中臣清親が奏上した寿詞が記載されています。

内容は二段に分かれます。天孫降臨の後、中臣遠祖の天兒屋根命(あめのこやねのみこと)が天忍雲根命(あめのおしくもねのみこと)を「天之二山(あめのふたのほり)」に遣わして、神漏岐・神漏美(かむろき・かむろみ)命から「天乃玉櫛(あめのたまぐし)」を賜って帰り、地上において、その玉櫛を刺し立てて「天都水(あまつみず)」を湧出させるという、天都水の由来を語る前半部。そして、卜定(ぼくじょう)された悠紀・主基(ゆき・すき)両齋国郡の由庭乃瑞穂(ゆにはのいなほ)をもって大嘗所聞食(おほにひきこしめ)す、という大嘗祭儀を語る後半部から構成されています。

この康治元年十一月の中臣寿詞(天神寿詞)を世に紹介したのは、今井似閑「万葉緯(享保二(一七一七)年頃)と本居宣長「玉勝間」(寛政七(一七九四)年)ですが、鈴木重胤は、「中臣寿詞講義」上巻において、「儀式踐祚大嘗祭儀」「踐祚大嘗祭式」を基にして詳細に大嘗祭を解説し、下巻において中臣寿詞全文の解釈を展開しました。これは、本格的な大嘗祭研究・中臣寿詞研究の嚆矢と位置付けられます。

○『日本書紀伝』三十卷(嘉永六(一八五三)年文久三(一八六三)年の遭難にて中絶)。  
重胤が生涯の事業として、その晩年に全精力を傾注した『日本書紀』の注釈書です。考証は精緻を極め、まさに博引旁証と称すべき労作。「神代紀」の天地開

闢から天孫降臨第一の一書迄です。

執筆意図として、六之巻の奥書に「以て上は朝廷のために、下は万世のため」、この書を綴るといい、二十九之巻の奥書に「まさに道と活き、道と滅ぶべくして」云々と記されています。

#### 四、鈴木重胤の皇典(神典) 研究の目的と方法

—「大御正史(おほみふみ)」と「大御政(おほみまつりごと)」—

重胤が生涯をかけて対峙した古典研究の目的と方法を考えてみましょう。重胤自身が『延喜式祝詞講義』総説において以下のように述べています。算用数字は便宜上、私が付したものです。

①天照坐皇太神の大御命以て、…天下を治食む大御政を行ひ給はむ制度(スベ)を、天津宮事以て事依し授奉給へり。

まず、天下を統治する大御政(おほみまつりごと)とは、天上の天津宮事(あまつみやごと)のことである。

②御世々々の天皇命等の現人神と御在して食国天下を治め給ひ、撫給ふ大御政はしも即ち天津宮事にて、其天津宮事は天社国社の皇神等を齋祀り奉り給ひ、其御守護を資(エ)て、大御宝を順給ふ調給ふ御業にて、此祝詞に悉く伝はれる此なり。

天皇が現人神として統治されることは天津宮事で、それは、天神地祇を奉斎し、その加護により、大御宝(おほみたまから 国民)を慈しみ育むこと。その御業(方法)が祝詞に伝えられている。

③古事記・日本書紀は、天地の未生りし時より、皇神等の高天原に在して天地を鍛造り給ひ、万有を造化し給へるより、始て天皇命の大御世系を記伝られたる宝典にて、天下に二なく尊き大御正史なれば、…

実に天地を胸隔の内に認(ト)め、万有を識神の中に蔵(コム)べき宝典なれど、食国天下の大御政に、主(ムネ)と係て記せる書ならず、君臣の大綱と、天下の

大道を觀つ可き也。

大道斯に存る故に、天下は天下にて自治り、国家は国家にて自乱ざる也。皇國固有の美を知り、天統無彊の徳を明らむ可き物。實に此二典に在り。

古事記・日本書紀は、天皇の大御世系を記した大御正史である。従つて、記紀は、食國天下の大御政に主として関わる書物ではなく、君臣の大綱、天下の大道を示した書物である。

④ 偕此祝詞はしも、天下の大御政の御制度書なりと云ふ由は、世界の物も、事も小と無く大と無く、悉くに皇神等の御靈に頼る事なれば、専ら其御恩頼に報奉り、尚其御靈を仰ぎ憑奉りて、天下國家の穩当に在らむ事を祈奉給ひて無事を計給ふなむ、大御政の常にして、……

是以て上古の政を知り、神幽の事を窺ふの捷徑、此に過たるは有可からず、蘊奧此に超たる物も亦有可からず。……真に天下に比なき古語にして、朝家の政令、民用の綱紀、此祝詞に悉く備はれり。實に万国に類なき宝文なりかし。

祝詞は、天下の大御政の制度を記した書物である。御恩頼（みたまのふゆ）を蒙り天下國家の穩当あらんことを祈り、無事を計ることが、大御政の常のあり方である。祝詞は、上古の大御政を知り、神幽の事を窺うための捷徑（しょうけい）であり、その奥義を伝えた書物である。また、祝詞は、朝家の政令、民用の綱紀を記した書物で、それらのことは、この祝詞に悉く備わっている。實に万国に類なき宝文である。

⑤ 皇國の古道は殆ど廢れたりと皆人の慷慨み思ふことなれど、予を以て此を觀るに、少かも衰坐りとは見えず。皇天の神化、自然にして行はれ、朝廷の靈威、無為にして存せり。唯知と不知とのみなり。實に古語に所謂る皇神の愛（イツ）くしき國、神隨言挙為（セ）ぬ國なること、弁を待たずして鮮明（アキラカ）なる者なり。

皇國の古道は今も嚴として存在し、皇天の神化は自然に行はれ、朝廷の靈威（み

たまのいつ）は自ずから備わっている。我が國は、皇神が愛（いつ）くしむ國、神隨言挙為（かむながらことあげせ）ぬ國である。

⑥ 近世、賀茂大人始て此祝詞を著述給ひてより、天津宮事の古義始て天下に明らかになりしわ、鈴屋大人將（ハタ）古事記伝を物為給ふ因みに、此祝詞に深く心を用ひ給へる故に、弥々明らかになりて來ぬるを、伊吹屋大人又其志を繼して、古史伝と云ふ書に益々其事を委曲に記し給ふらむと思はし、故に今註（イ）ふべき条々はしも、全に無に似たりと雖も、此祝詞を拔萃（ヌキイデ）て別に説言為るには非ず、事の因々に説き弁られたるなれば、此も彼も尽せりとは云可からぬを。

祝詞の注釈史。賀茂真淵の『祝詞考』、本居宣長の『古事記伝』、平田篤胤の『古史成文』・『古史徴』・『古史伝』が報告されているが、十分に意を尽くしているとは思えない。

⑦ 然れ共、右の二大人等の説に悉く趣意の違ふ事にし有れば、如何にぞや思ふも有べけれども、學術は道を明らかに為む為にして有れば、然のみ泥むべきに非ず。先学の説に異議・疑義を呈しているが、それは、學問とは道を明らかにすること、大御政の有様と意味を明らかにすることであり、説の相違のみに拘泥するべきでは無い。

重胤によれば、皇典に二種あり、それらは相互に補完するものである。一つは、天地開闢より高天原の皇神（すめがみ）を経て天皇に到る「大御正史（おほみふみ）」を記した歴史書である「古事記」「日本書紀」。この二書に君臣の大綱と天下の大道が示されているとする。一つは「祝詞」。「祝詞」は、天皇が皇神より受け賜った御詔命であり、皇神の御恩頼を仰ぎ、天下國家の穩当たることを祈り奉る「大御政（おほみまつりこと）」の規範・制度を記した書であるとする（「延喜式祝詞講義」総説）。

## 五、鈴木重胤の大嘗祭研究

折口信夫氏「大嘗祭の本義」（『古代研究 民俗学篇二』、大岡山書店、昭和五年、後、『折口信夫全集』第三卷に再録）。昭和三（一九二八）年の昭和天皇大嘗祭に際して発表された「大嘗祭の本義並びに風俗歌と真床襲衾」（『國學院雜誌』）等を基に成稿された論文です。

悠紀・主基両殿の室の中央に鋪設される第一の神座（寝座）の「八重畳」「御衾」「御単」（『延喜掃部式』『北山抄』）などの寝具を、天孫降臨神話の「真床覆衾（まとおふふすま）」と解し、天皇が神座に臥す時に「天皇霊」と一体となり、「完全な天子様となるのである」と説く。折口説の学説上の意味は天孫降臨神話を大嘗祭の祭儀神話と見なし、さらに『日本書紀』に散見する「天皇霊」についての独特の解釈とを結びつけ、大嘗祭を王者誕生儀礼として理解しようとしたところにあります。

天孫降臨神話と大嘗祭との関係については、夙に、鈴木重胤が、天孫降臨神話の「真床覆衾」を大嘗宮神座の御衾に比定・関連付けて理解していることが確認されます（『延喜式祝詞講義』十二上・『日本書紀伝』二十九）。この重胤説が「真床覆衾」と大嘗宮神座との関係を的確に指摘した最も早い説であると思われる。折口氏は、重胤を「国学者中最大の人」・「神道学者の意義に於ける国学者の第一位」（神道に現れた民族論理）と高く評価しており、折口氏の真床覆衾説は重胤説を直接継承したものとも考えることも可能でしょう。

## 六、鈴木重胤と地鎮神祠（とこしずめのかみのほくら）

嘉永七（安政元年 一八五四）六月十五日、重胤は江戸を出立して、御鏡を奉納するために、筑紫の宗像神社への参詣の途に就きます。江戸への帰路、十一月四日、遠江国新居（荒井宿）において、東海大地震に遭遇することとなる。

『宗像詣記』に「嘉永七年十一月四日巳上刻云々、大なる地震云々」と記しています。

新居宿（あらいのしゆく）は、東海道五十三次の江戸側から数えて三十一番目の宿場で、現在の静岡県湖西（こさい）市。新居関は浜名湖と遠州灘がつながる開口部で、陸の関所であると同時に海の関所も兼ねていました。

余震と津波の余波が続く大混乱の中で、人心の動揺を鎮めるための方策について、新居の有力者（諏訪神社神主の飯田真琴・高須葛根など）からの相談を受け、重胤は次の二点の事業を提案し実行します。

①窮民の救済。十一月四日荒井（新居）宿にて、大地震救済のため、米三百俵を集め被災者救済に務めた。

②地鎮社（とこしずめのかみ）という神社を創建することを勧め、十一月十五日には、同地諏訪神社の地に仮殿を設けて勧請の祭りを行った。その時の「地鎮神祠の祝詞」に依れば、鹿島大神・香取大神・杵築（きづき）大神・宗像大神を勧請して御祭神とし、大御宝（おほみたから）の平穏な生活を祈願した。

重胤が地鎮社を創建した意図は、重胤が記した安政六年三月六日の記録に窺えます（新居町役場）。

地鎮社つかう奉れるゆゑを云べし。いにし嘉永の七年にや有けむ。東海道の国々大なる地震の事有けるに、殊に新居のあたりは、いとほげしかりければ、人の心いつしづまるべしともみえざりけり。その時里人の云けるに、国こそりての悩みを、ことはかり私する神の御心にはおはし坐ざらめども、このさわぎ止まるべき方もや有ると、とひけるに。おのれも其事によりてこゝにさへられたる程なりければ、常に信み奉る神をとうで、この神をだにいつきたらむにはと云す、めて、即御名どもを唱へさせけるに、日に日にうすくなりゆく地震も、神のみたまによる事と、人皆思へりけり。

新居の有力者が重胤に問うたことは、この大震災が、国全体のことを考えている

神の御心から起こったことではないことは判っているが、人心の動揺と荒廃をどのように鎮めるか、その方策でありました。重胤が教示した方策は、重胤自身が常に深く信仰している神々だけをこの地に勧請して、地鎮社を創建することでした。重胤の意図は、現実的で、新居の人々の動揺を鎮静化させることにありました。

## 七、鈴木重胤と皇學

本学は皇學館大学ですが、その「皇學」という用語を重胤は使用しています。

○天保十五（一八四四）年六月の長歌（嘉永四（一八五二）年九月に補訂 『鈴木重胤紀行文集』一）

春山の藤原の朝臣 光憲 正き翁を 皇學の同じ輩（ともがら） 神習ふ等族（ひとしうから）と

○「筑紫再行」（安政五（一八五八）年四月 『鈴木重胤紀行文集』三）

宗像大神はしも、はやうよりこの皇學の事につきては、朝夕に尊き御蔭を蒙ふり奉る事なむ多かりければ

第四節でも述べましたが、重胤の学問は神々に対する深い信仰に立脚しています。重胤の主張のキーワードは、「天津宮事（あまつみやごと）」です。天照大神の大御命を受けて、天皇が天下を統治する大御政（おほむまつりごと）とは、天上の天津宮事のことであると指摘する。そして、天津宮事とは、天社・国社（あまつやしろ・くにつやしろ）の皇神（すめがみ）等を奉祭し、その守護を得て大御宝を撫育する御業であり、その天津宮事を、この豊葦原の瑞穂の国に具現したものが、天皇が統治する、天皇を中心とする国柄を持つ大和国であると考定します。従って、重胤の学問とは、「天津宮事」のことと、天照大神の大命を受けてこの国土を統治する天皇の政治のあるべき姿とを、具体的に詳細に明らかにする学問と言えます。重胤はその探求を「皇學」と呼んだと思われまます。

本学は、神宮祭主久邇宮朝彦親王の令達により、明治十五（一八八二）年四月

鈴木重胤翁の人と事蹟（シンポジウム）

三十日、林崎文庫内に皇學館として創設されました。皇學館の創設に関与した一人として、敷田年治（文化十四（一八一七）年七月〜明治三十五（一九〇二年一月）がいます。敷田年治は、神宮祭主久邇宮朝彦親王の招聘に応じ、明治十四年、伊勢の神宮教院本教館に奉職します。同館閉鎖の後、翌十五年には創設された皇學館の教員を勤めました。

敷田年治は、『日本紀標註』などの注釈書を著した研究者で、鈴木重胤と同世代で、親密な交友関係を結んでいました。敷田年治没後三十年祭に編まれた『桃垣葉』（皇學館大学史料編纂所、平成十四年）には、年治宛の重胤書簡が三十七通収録されており、重胤と年治とは懇意な交友関係であったことが伺えます。また、死去した重胤を悼み、元治元（一八六四）年八月十五日に、鈴木重胤一周忌追悼の歌会を開いたのは敷田年治です。

本学の「皇學館」の「皇學」は、開学に関与した敷田年治が提案した校名で、その由来は、年治の敬慕した鈴木重胤が独特の意味を付した「皇學」こそが相応しいと判断したことによるのではないかと考えています。

### 〔相互討論〕

〔大平〕 それでは相互討論に入らせていただきます。まずは報告者の方から補足なり、もしくは他の報告者に対しての質問等がございますか。

〔佐野〕 私自身が、まだ勉強はじめてばかりですので、今日は決意表明という形で発表をさせていただきました。他の先生方に質問というか、コメントというのは、なかなか難しいところがありますが、私が一つ興味深かったところが浦野先生の御発表で、羽田野敬雄に『日本書紀伝』巻十四の四冊を貸しているということが出てまいりました。「十四之巻四冊」とは、四神出生章の最後の四冊ですが、他にはこれ以前の巻は貸していなかったのか、なぜこの「十四之巻」なのだろうか、ということに疑問を持ちました。

【浦野】すっかり見てはいないのではっきりしたことは言えないのですけれど、谷先生が書かれた『鈴木重胤の研究』の中に、羽田野敬雄の所の何冊か『祝詞講義』や『日本書紀伝』の一部が大国隆正の目に触れたかもしれない、と記されておりますので、羽田野敬雄に幾つかの本は貸していたのではないかと思います。

それでは質問という訳ではないのですけれども、私が語らせていただきました紀行文ですね。神道研究所が出している『鈴木重胤紀行文集』所収のもの以外にも、まだ紀行文集は残っているそうです。日記ですとか、紀行文が沢山あるということですので、これはもう今後は非とも翻字したいなと思ったのですけれど、先程一つ重胤の字の間違いを指摘頂きましたので訂正いたします。最後「ますらをあれば」と言いましたが、「ますらをなれば」ではないのかと指摘いただきました。私にとって重胤の字はちょっと読みにくい字ですので、まずこの字に慣れて未公開の紀行文を読んでいただけたいなと思います。

【大平】加茂先生お願いいたします。

【加茂】鶴岡市大山の大瀧家において大切に保管されてきた重胤先生の自筆資料を、本学を信頼して寄贈して頂きました。このシンポジウムの趣旨は、重胤先生自筆資料の寄贈を受けましたので、本学研究機関において、重胤先生についての基礎知識を含めて、特に専任の方々に、重胤先生研究を幅広く深めていく発端となればという思いで企画いたしました。御報告では、各先生いずれも口々に専門ではないという話が出ていましたが、そういったことをおっしゃらずに、神道は研究の幅が広く、様々な想いを託して寄贈頂いたわけですので、この資料を大切に保管した上で、活かすように研究を進める責任があると考えてください。私も含めて、これだけの人物ですので充分に解明できたとは言えません。着実に実証的な研究を進めていきたいというふうには思っております。

佐野先生に一つ、ご質問。報告は、なかなか面白かったのですが、「すぎお」と言っている神社。私もこのお宮さんに行きました。谷先生から、同社に懸かっ

ている扁額の裏を確認して欲しいとの依頼で、宮司さんとともに裏返して確認したことがあります。宮司さんとご子息が皇學館出身で、不躰なお願いも聞いていただきました。神社名は「すぎのお」だったと思いますが、如何でしょうか。さらに、報告で、重胤の研究が国家の為の研究だということを述べられましたが、重要な観点だと思しますので、もう少し説明してください。

【佐野】「相尾」については、「すぎお」なのか、「すぎのお」なのかの訓みについての問題はあると思いますが、本当に大瀧家から近いところにある神社ですので、単純に考えれば、相尾神社の氏子である大瀧家を含めた庄内の門人が世話をしてくれていることへの謝辞という意味もあるのかなと思います。今後さらに検討していかなければならない課題ですが、書簡が多く残されておりまして、未翻刻の書簡の翻刻から、大瀧家と重胤先生との関係をもっと深く追究していくことができればと考えています。それから『日本書紀』の詳細に学ぶことによつて、それによつて国家を守護することができるというのは、やはり開国の影響もあるというように考えられます。「外国」のことまで知らなければならぬと仰つてるので、当時の状況や時代背景も含めて探り、今後は深めていければいいなと考えています。

【加茂】佐野先生の最後のまとめのところに国家を守護すべき書物という言葉がありますが、これでは少し理解しにくいと思います。なぜ『日本書紀』の研究が守護すべき書物なのかという、そういう趣旨でお話を聞きたいのです。おそらくはもちろん幕末の争乱の中のことも考えなければいけません。重胤先生からすれば、いわばこの皇国（スメグニ）があるべき正しい状態を記しているから。だからそれを正しく読みとくことが、天津宮事を起源とする大御政を体現していく皇国を理解するための書物である。重胤先生からすれば、そのようなことを言われなくても守護されている皇神たちが愛（いつく）く国だということだと思います。やや唐突な結論だったので、その点をお聞きいたしました。浦野先生は今回やっ

てみてどうでしたか。

【浦野】難しかったです。

【加茂】頑張ってください。

#### 【質疑応答】

【大平】それでは、会場に学長の清水潔先生がお越しですので、何かございましたらお願いいたします。

【清水潔】ありがとうございます。今年に入りまして大瀧家から鈴木重胤先生の御遺著が、一括して本学に寄贈されました。今年の三月二十四日でしたが、セクター長の大島先生と、本日発表の佐野先生とともに大瀧家に直接参上いたしました。その時に正式に本学に寄贈いただき、同時に本学として感謝状を贈呈申し上げました。その年の暮れに、こうして研究開発推進センターの神道研究所のシンポジウムが「鈴木重胤翁の人と事跡」というテーマで開催していただいたことを本場にありがたく思います。三月二十四日に訪問させていただいた時に、大瀧家のここに鈴木重胤先生が逗留をされ、ここで著述執筆をされました、というその部屋を拝見させていただきました。ここで講義されました、と紹介をいただき、まさに鈴木重胤先生が、そこに居られるような大きな感銘を覚えたことを、今も鮮やかに記憶しております。今日のシンポジウムでは、三人のそれぞれの立場でお話頂きましたけども、この鈴木重胤翁の直弟子であった大瀧光憲から五代に渡って代々、この大瀧家が重胤翁のすべての御著書を大事に守り伝えてきた、という大瀧家の精神というものを、まず本学は継承しなければならぬと思います。学問における慎み、そういうことが最も大事だろうと思います。私は、谷省吾先生の学問、著書、そして谷先生のお話をされることを聞いておりましたが、その中心には学問を進める心の中に慎みということが、全体を通じて貫徹されているということを感じて非常な感激を覚えました。『日本書紀』の研究をすすめてい

た重胤翁が、神代巻の天孫降臨のところ暗殺されるという不幸に遭って完成できなかった。私は完成された部分を精読したわけではありませんけども、そこから伝わってくる重胤先生の学問に対する姿勢というものを我々はしっかりと学び取らなければならないだろうと思います。明治以降に『日本書紀』の注釈書というのは、たくさん出版されており、岩波書店の日本古典文学大系本や小学館の新編日本古典全集本などがありますが、個別具体的な注釈について、この語句の出典がどこかとか、科学的・合理的な説明は、今の学界のレベルで、ほぼ集大成されているかと思えます。我々はその上に立って、鈴木重胤先生の学問を継承し伝えていく上において、何が大事だろうかというたことを私は思うわけです。もちろん実証的な裏付けというものは最も大事だと思いますけども、同時に学問を進める上での精神も同時に学んで行く必要があるだろうと思います。それで加茂先生が、「皇学」について鈴木重胤先生の考えの中に「皇学」の用例を見出されて早い用例だという御指摘をいただきました。確かに、そうなのですが、例えば、重胤先生が師事された大国隆正も「皇学」という用例があったと思います。私は皇御国を学んでいる「皇学」という二字にはなっていないけれども、ほぼ同じ意味で本居宣長などもお使いになっておられるかと思えますので、「皇学」そのものの用例については、もう少し広い視野で見ていく必要があるのではないかなと思います。ともかく、こうして重胤翁に関する第一回のシンポジウムが「鈴木重胤翁の人と事跡」というテーマで開かれたことを大変嬉しく思います。実を言うと、大瀧家御当主の直之助様から最近お聞きしたことは、五代に亘って守り伝えてきた鈴木重胤先生の御遺著を、皇學館大学に全部お渡しさせていただいたことで、御自身の肩の荷が降りたということをしみじみと語っておられたそうです。そのような意味でも、我々の責任は非常に重いなように思います。コメントにはなりませんけれども、感想を申し上げてバネラーの皆様感謝申し上げます。ありがとうございます。ありがとうございました。

【大平】ありがとうございます。それから佐野先生のご報告の中でお名前が出てきました、当センターの副センター長の荊木先生、ご質問や一言ございましたらお願いいたします。

【荊木美行】それではいくつか教えていただけたらと思います。『日本書紀伝』は途中で中絶して神代巻の途中で終わっているわけなのですが、重胤自身は本文の三十巻全部に注釈をつけるつもりがあったのでしょうか。その辺りについては、今残っている史料でわかるのでしょうか。

【佐野】神代巻については、確実に作るつもりでいられたでしょうけども、いかがでしょうか加茂先生。

【加茂】神代紀は間違いなく注釈を完成させるつもりだったと思います。まさに「天津宮事」でありましたから。天孫降臨一書迄であの分量ですので、神代紀以降については判りません。

【佐野】さっき読みました史料の中で、三百巻におよぶまで云々という文言があるので、『日本書紀伝』神代巻だけで三百巻なのか、あるいは『日本書紀』の最後まで注釈で三百巻なのかわかりませんが、三百巻近くまで書けるくらい分量の注釈をしようと思われていたのではないのでしょうか。神代巻が終わった後に、歴代天皇紀について構想があったのかということは、現段階ではわかりません。

【荊木】確か自筆の著述書目に、一応五十巻という計画で書かれていたかと思えますので、その五十巻というのが持統天皇紀までを意味しているのかどうか、私もよくわからないので色々と考えております。今後大瀧家から頂いた史料を見ていくなかで、重胤の計画や構想がわかるような資料もあるかもしれませんね。あと、大瀧家とやらんで越後の桂家というのがあります、これが重胤門下では非常に有力な弟子であり後援者であったわけなのですが、大瀧家と桂家はなにか横の連絡はあるのでしょうか。弟子同士のネットワークみたいなものはあったので

でしょうか。

【加茂】大瀧家と桂家との関係については、確認しておりません。ただし、例えば、下関の白石正一郎と大瀧家は関係があります。白石家は豪商で船を持っていますので、大瀧家が白石正一郎に連絡をして、船を廻してもらって重胤関係の荷物を目的地まで運んでいます。そのように、門人同志の繋がりが確認されますので、大瀧家と桂家との間にも関係はあったと思います。

【荊木】その辺りについてもひとつの課題になってくると思うのですが、桂家にも重胤の書簡が多く残っているのですよね。それで浦野先生にお伺いしたいのですが、重胤の旅行好きというか、あちこちに積極的に出かけていく国学者の全国行脚というのは、弟子の獲得がひとつ狙いとしてあったのではないかと思うのです。もちろん、宗像へ行くのは重胤の信奉だというのはわかるのですが、その辺りがでしょうか。

【浦野】門人の獲得もあったとは思いますが。この時代の国学者の方は、かなりのネットワークを持っていて、色々な所に行って教えていただけではなく、行った先の方からも教えていただくというネットワークを持っていますので、重胤の場合もそういうネットワークを活用して著作を書いていたのではないかと思えます。

【荊木】私もあると思っています。『日本書紀伝』を読み進めていきますと、幕末のころになって五風土記の一つの『播磨国風土記』というのが出てくるわけですが、それを重胤はどうしても手に入れたいのですがなかなかそうもいかない。そこで弟子のネットワークやコネクションを利用して、二十八巻を書いている辺りでやっと手に入れて、それを『日本書紀伝』の研究・注釈に活かしているという場面がかなり長文にわたって出てきます。また、京都あたりで史料の入手にあたって随分世話になったというお話も出てきますから、とても面白いなと思っています。最後もうひとつ質問なのですが、鈴木重胤は暗殺されてしまうわけなの

ですが、誰にどういう理由で暗殺されたのか、知りたい方も多いのではないかと  
思うのですが、わかっている範囲でどなたかお教えいただけると嬉しいのです。

【加茂】暗殺した人はわかっておりますが、差し障りがありますのでここでは控  
えたいと思います。それを言ったところであまり意味がないと思います。ただ  
我々としては是非せめて天孫降臨一書だけではなくて、天孫降臨条の全体、更  
は続く注釈を見たかった、重胤の意見を聞きたかったというのが本心です。そ  
の方が大事だと思います。

【荊木】ありがとうございます。

【大平】それでは、会場にお越しの方から何かご質問がございましたらお受け  
いたします。どなたかご質問ございませんでしょうか。

【足立涼】皇學館大学大学院神道学専攻の足立と申します。私恥ずかしながら重  
胤先生については不勉強だったのですけども、今日先生方のお話を伺いまして大  
変学識を深めることができました。ありがとうございます。先生方のお話を伺っ  
ておりまして少し感じたのが、鈴木重胤先生を理解するポイントの一つに、重胤  
の信仰という点が挙げられるのではないかと思うのです。例えば、佐野先生がお  
話になりました「私の説は私の考えではなく、大神の考えである」ということ  
ありますとか、加茂先生のお話にもありました「花山院家の宗像神社に参拝した  
ときに何か思う所があつて宗像信仰を強めた」とか、その辺りが大変興味深い  
点だと思うのですが、重胤先生の信仰の背景にあるものは一体どういうものがある  
のだらうなと疑問に思いました。浦野先生や佐野先生が挙げていらつしやる『国  
史大辞典』だと「元来敬神の念すこぶる強かつたが」としか書いておらず、例え  
ば本居宣長ですと「自分は吉野水分の申し子である」とか、平田篤胤ですと「恵  
まれない幼少期を経て出奔して」云々といったことが信仰の背景に挙げられる  
のではないかと思うのです。では、重胤先生の信仰思想背景のもとになっている  
のは何なのか、わかっている範囲でお教え頂ければと思います。

【加茂】また答えにくい質問を。まず一つは重胤先生が深く信仰されたのは宗像  
信仰です。それについては谷先生の論文「鈴木重胤の宗像信仰」(『鈴木重胤の研究』  
所収)という論文があります。内容は紹介しましたように、花山院家で屋敷神と  
いうのかな、邸宅で祀られている宗像の神をお参りしたときに、言葉では言えな  
いほどの深刻な衝撃を受けられたそうです。それをもとにして宗像に何度も参拝  
されます。それから幕末の段階で、日本各地でほとんど廃れていた、あるいはほ  
んどお祀りされていない宗像神の復興に大変力を尽くされます。特に、奈良県  
の宗像神社の復興はまさに重胤先生の功績です。個人的な体験を基に、宗像神を  
深く信仰されています。その原動力は、宗像神に感応したという宗教的体験だ  
と思います。

【大平和典】そろそろ時間になって参りましたので、以上でよろしいでしょうか。  
それでは最後に閉会の挨拶をお願いします。

【閉会】

【佐野】一時半からもう五時ちかくになってまいりました。皆様、本日は長時間  
にわたりましてお疲れ様でございます。このシンポジウムですが、来年度の『研  
究開発推進センター紀要』第六号に掲載される予定となっております。今日のシ  
ンポジウムは、学術シンポジウムと銘打ちながら、これから神道研究所におきま  
して、鈴木重胤先生について勉強をしていこうという決意表明という決起集会  
というかそういうニュアンスの方が強かったと思います。今後は、神道研究所  
において御寄贈いただきました重胤先生の御著書および書簡類を整理して、未公  
刊のものは少しずつ刊行していきたいと思っております。以上をもちまして、平  
成三十年度の皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術シンポジウム  
「鈴木重胤翁の人と事跡」を閉会とさせていただきます。本日は年末の押し迫っ  
た中、また足下の悪い中を御参集いただきまして誠にありがとうございました。

















げせしぬ国である。

⑤近世世界史大論で此祝詞を著述しており、天津宮守宇幕始て天下に明らかけたりしわ錦屋大將一ツ、古事記伝を物縁等因みに、此祝詞縁々心をを用ひ給へる故に、弥々明らかに成りて来ぬをぞ、伊吹屋大入其意纏して、古史伝三全書に益々其事を世記し給ふらむと忍ほし、故に註下「ふべき衆々は、全に無に成たと雖も、此祝詞を採奉(マキマテ)て別に認言るに非ず、事の因々に記せられたるなれば、此祝も尽せりととは云可いかぬを。 ※祝詞の注釈に、賀茂真淵の『祝考』、本原長の『古事記伝』、平田篤胤の『古史成文』、『古史観』、『古史伝』。

皇典に「種別」相互に制するもの。一は、天地開闢も高天原の皇神を尊て天に到る「天御正史(おほみかみ)」を記した歴史書である「古事記」。「古事記」の「三書」君臣の大御と天下の大運が示しているときれる。一は「祝詞」。祝詞は、天皇が皇神を受け賜った御詔で、あり、皇神御願を仰ぎ、天皇の御意だたることを祈奉る「大御政(おほみまつり)」の規範、制定記した書である(「延喜式祝詞撰」総説)。

五、錦水腫と大嘗祭研究  
折口信夫氏「大嘗祭の本義」(『古史研究 民俗学篇』、『大岡山書院 昭和五年』、後「折口信夫全集」第三巻(下巻)) 昭和三(一九一八)年の昭和天皇大嘗祭に際して撰された「大嘗祭の本義並びに風俗歌(貞良撰奏)」(『國學雑誌』)等意見を成構された論文  
悠紀・生高殿の室の中央に鋪設せる第一の神座(座)の「八重葎」御坐「御坐」(「延喜部式」(北山抄))などの賢を、天孫降臨神話「貞良撰奏」と解し、天皇が能に守時に「天皇」と体となり、「空在文字様となるのである」と説く。折口説の解釈の意味は天孫降臨神話を大嘗祭の祭神話と見なし、さらに「日本書紀」に撰する「天皇」についての独特の解釈を結び、大嘗祭を王者誕生儀として理解しようとしたところにある。

名をも唱へてけるに、日に口はすくなくなりゆり地震も、神のみたまにふる事と人皆思へりけり。

- 七、錦水腫と皇舉  
○保十五(二八四四年六月)の撰、蘇水四(八五二年九月)に補訂『錦水腫紀行文集』(一) 春山の藤原朝臣 光憲 正き翁を 皇学の同じ撰(ともがら) 神聖な等族(とじから)と ○『撰集抄』(安政二(八五〇年)四月 『錦水腫紀行文集』三) 宗像大神は、はやつらつら皇学の事にて、朝夕に尊き御座を奉り奉る事なむ多かりければ  
神宮祭主(醍醐親鸞王の守護にも)、明治十五(一八八二)年四月二十日、林崎文庫内に皇學館創設。  
敷田幸治(文化十四(一八七五年)与、明治三十五(一九〇二年)一月) 神宮祭主(醍醐親鸞王の招請に依り、明治十四年、伊勢の神宮教院本教院に繼ぎ、同願願の後、翌十五年には創設された皇學館の氣を勉める。

5

天孫降臨神話の大嘗祭との関係については、風に、鏡(倉庫)が、天孫降臨神話「貞良撰奏」を大嘗宮神座の御坐に比定、関連付けて理解していることが確認される(「延喜式祝詞撰」十二上、「日本書紀伝」(二十九))。この重胤説が「貞良撰奏」と大嘗宮神座との関係的確に指摘した故も早い説であるといわれる。折口氏は、重胤を「国守中村大入」(「神道守」の意義に於ける国守者の第一位(神道に現れた理論)と高く評価しており、折口氏の貞良撰奏説は重胤説を直接継承したものと考へることも可能である。

六、錦水腫と地鏡神祠(ごしめのかみのほら)  
蘇水七(安政元年 一八四〇)六月十五日、重胤は江田立、筑紫の宗像神社への参詣(御奏) 御) 江戸へ帰路、十一月四日、津江(新居(荒井)宅)において、東海大地震に遭道。『宗像記』に「蘇水七年十一月四日荒井(新居)宅にて、大地震驚のため、米三百石を集め被災者救済に務めた。  
①新居の救済、十一月四日荒井(新居)宅にて、大地震驚のため、米三百石を集め被災者救済に務めた。  
②地鏡社に、神社を創建することを始め、十一月五日には、同地鏡社に地に仮殿を設けて御請の祭りをした。その時の「地鏡神祠の祝詞」に依れば、唐島大神・香取大神、宗像大神・宗像大神を勧請して御祭神とし、大御坐おほみかみの皇孫生活を祈願した。  
重胤が地鏡社創建した意図は、重胤が記した安政元年三月六日の記載に拠る(「新居町誌」)。地鏡社が奉られるゆゑを云へし、いにし蘇水の七年に有付、東海道の四大なる地震の事有けるに、筑紫のあたりは、いとけりしかりければ、人の心いつじまるともみえざりけり。その時里(今)云けるに、國(今)での様子を、ことば伝ひ私する神の御心は持はし坐せらめども、このおほみかみなるべき方も有る」といひける。おのれも其事にたつとにぞいられたる程なりければ、密に信み奉る神をたて、この神をたてつゝおたらむにはいとすくめて、御

6